

愛国詐欺

三山 喬

「ポスト真実」と「南米勝ち組事件」

勝ち組

第1回 ふたり組

人生の一時期を南米で過ごした経験がある。三十代の終わりから四十代半ばにかけての七年弱。五十七歳になる現在から振り返れば、十年余り前のことだ。

居住したペルーには、その時点で約八万人、南米でブラジルに次ぐ規模の日系社会があった。移住直後の二年間ほどは「ペルー新報」という日系のコミュニティ新聞に籍を置き、その後はフリーの現地在住記者として南米各地の話題を日本の雑誌に書き送った。『望星』には、大陸各国の日系社会を訪ねたルポ記事を数年間不定期で連載し、帰国後の二〇〇八年、『日本から一番遠いニッポン 南米同胞百年目の消息』（東海教育研究所）という一冊の本にまとめた。

と、自己紹介めいた話から始めたのは、今回この新

しい連載で私は、南米に暮らしていた時期に十分捉えきれなかった問題を、改めてもう一度見つめ直したいと思っているからだ。

「愛国者」を自負する人々が「売国奴」と認定した同胞を激しく非難・攻撃し、反対勢力もさまざまな手段で相手の集団を壊滅しようとした。幾多の犠牲者を生み、無実の人々の大量投獄を引き起こした抗争。憎しみの連鎖は、同胞の間に修復困難な亀裂を刻み込み、一方でその状況を利用して私腹を肥やそうとした者たちもいた――。

終戦後の南米で起きた日本人移民社会の出来事である。

「南米」や「移民」という言葉から、「自分とは無関

係な遠い世界の出来事」と感じる読者もいるに違いない。私自身、前述した著書では「南米に住む日本人の間で、こんな驚くべきことがあった」と、歴史奇譚を紹介するような書き方をしてしまった。

だが現在の感じ方は違う。あれから十余年の歳月を経て、どう見ても私のかつての認識は、この本質にたどり着けていなかった、そう思うに至っている。

老移民たちの話を聞き、資料を読み込んで知った出来事は、確かに驚きに満ちていた。だが「前代未聞」と思われた事件は、果たして本当にあの時代、あの場所でなければ起こり得なかったことなのか。落ち着いて考えれば、そうも言い切れない気がしてくる。

現代の日本に生きる私たち、あるいは世界各国の人々がここ数年、共通して抱くようになった時代状況への不安、社会を分断する黒々とした感情に立ちすくむ思いは、もしかしたらかつて移民たちが直面した光景と、変わらぬものではないのかと。

ひとこと言えば、南米での出来事は「集団ヒステリー」とでも呼ぶべき理性の喪失であった。ウソでもデタラメでも「信じたい情報」だけを信じ込む人々の

盲目的な暴走――。

そんな言い方をすると、読者の脳裏には、ポスト真実やフェイクニュース、歴史修正主義、ネット右翼等々の「今日的キーワード」が思い浮かぶかもしれない。そうなのである。私はブラジルと日本、約七十年前と現代という時空を飛び越えて、双方の類似性を痛感するに至っている。だからこそかつての自らの認識をもう一度見直したい、と考えるようになったのだ。

ポスト真実なる表現はここ数年、ネット上に満ちあふれる根拠なき思い込みの横行を意味している。しかし人間集団のそうした行動は、必ずしもネット時代に限定されはしない。中世の魔女狩りにしても、関東大震災における朝鮮人虐殺にしても、冷静な判断力を失った群衆の暴走と考えれば、まさに同根の出来事に他ならない。

ネットには確かに爆発的な情報の拡散力がある。しかし、その規模やスピードにおいては劣っても、原始的な口コミの情報伝達にも、集団パニックを引き起こすに十分な力は秘められているのだ。

現代人はネットやスマホという文明の利器の恩恵で、誰もが「多種多様な情報」を瞬時に調べられる環境を